

る、いわゆる「死の内患道路越え」になるとはこの当時  
誰もが考えもしなかった。十五日の終戦も知らず、あ  
でこぼこの悪路を避難民はひたすら、機銃掃射にさらさ  
れ、疲労と空腹、延々と避難の列が続いた。

内路駅からの鉄道による南下引揚げはソ連軍の命令に  
より中止となり、各々、復帰することとなった。

ソ連軍の占領、ソ連軍の移住、やっと昭和二十二年六  
月北海道へ引揚げたのである。

## 引揚者体験記録

北海道 松川正吉

私は留萌市の出身です。昭和十一年八月頃旭川師団か  
ら除隊になりましたが私の家は漁業で当時まで私の父は  
鯨漁をしていたのですが当時の鯨漁の業者は春三月頃か  
ら七月くらいまであさりをして又明年の春まで漁期を待  
つという漁業でした。

当時は鯨漁も不振になって来ていたおりでもあり、海

外へ勇躍するような気分で知人を頼り樺太の大泊の水産  
加工場へ出稼ぎに行き漁業の状況を調べて帰り翌十二年  
三月五屯内外の発動機船を岩内港から備船して大泊へ向  
け出港したのです。

その時家族を説得するのに大変でしたが母親も前年他  
界しておりましたので父親と兄夫婦と弟と五人家族でし  
たがまさに冒険といわざるを得なかったのですが、その  
年は幸にあさりに恵まれ樺太へ来た甲斐があったと喜ん  
だ次第でした。

それからは冬の結氷期を除き年間本当に昼夜の別なく  
働きました。お陰で年々実績も揚がり自己船も買い求め  
又住居も新築することも出来、十七年春知人の紹介で道  
南の江差から妻を迎えた次第でした。然しそれから間も  
なく兄が応召となり翌十八年七月二十二日南支の戦場で  
戦死し兄の家族は北海道へ引揚げたのでした。

その後戦況も悪い方向に進んでいた二十年七月現在居  
住している沙留の知人からの連絡で当時は帆立漁も私船  
でしたので私に動力船での漁法の指導に来てほしいとの  
依頼があり丁度休漁期であったので沙留へ廻船したので

すが、それから間もなく樺太での防衛召集令状が来たとの連絡があり船を乗組員と弟に依頼して単身樺太へ戻ったのですが丁度稚泊連絡船の中で終戦となったのです。

大泊へ到着と同時に本部へ馳せ参じたところ、既に全員配置に就いたので一時召集解除となり帰宅したところ乗組員の家族が集まって大騒ぎの最中でした。

丁度婦女子年寄りの強制引き揚げの通知のあったころでしたが、私の妻はその時出産予定日を二、三日も過ぎた状態なので引揚船に乗る決断をしかねていたのですがしかし急を要する状況なので翌日の引揚船に乗船させることでお産の支度の品だけを持ち又乗組員の家族も着のみのまま乗船させ沙留へ着いたら弟や乗組員に大泊へ船で迎えにくるよう伝言したのです。

その頃にはソ連軍艦がすぐにもくるとの噂が飛び各漁船の所有者や知人は家財道具等満載して全船引揚げたのでした。

ところが私の船は二十一日の朝大泊へ来てくれたのですが乗組員の家財道具等満載しもう一隻の持ち船にも満載して夜中に大泊を出発したのです。

丁度明け方中知床半島を通過したのですが、その頃ソ連軍艦が西能登路岬を廻り亜庭湾にはいったとこのことを後に知ったのですが半日の差で脱出できた事になります。が夜明けと共に海もしげだし大荒れになり曳船してきた持ち船も満載した荷物ともども放棄し難航の末漸くのとで枝幸港へ入港できたが、なざるまで約一週間ほど足止めされ八月末日沙留へ到着することができました。

しかし乗組員の家族を含め四家族十五人ぐらいの大家族の生活が始まったのですが食糧難の時代に言語に絶する苦難の始まりでした。私の妻も飯の浜小屋ではお産もできないとのことで江差の実家まで汽車を乗り継いで帰ったのですが其の翌日無事出産でき今でも神仏の加護があったと信じています。

それからの漁業もなかなか苦労の連続でした。地元の人達の間では外来者或いは流れ者的考えが強く正組合員として漁業するまでに何年もかかったものです。

すべて思う仕事も十分に出来ず更に不運も重なり二十九年九月の十五号台風には持船も、沈没させまたこの年には父親と次男と二回も葬式をするという具合で当時を

振り返ってよく過ごして来たと思うのです。

昭和四十年を過ぎた頃から漸く心が落ち着くようになりました。

## 樺太引揚者の断片

北海道 吉川 金次郎

大正三年四月、小樽港から北海道砂川町吉野で農業を営んでいた。私の一家が樺太に渡ったのが私が五歳のときでした。

それから昭和二十二年一月に当芦別に住みつくまでの樺太で過ごした歳月のあまりにも多くの出来事はとてもこの限られた紙面で語りつくせるものでない。

私には兄が三人と姉が四人で。私は末子である。樺太に渡ったときは父母に三男と四女に私と五人であった。

今は父母を初め兄や姉たちも既に他界して、常に病弱で心臓の持病とも、やがて十年余りもつきあいながら、今日まで生きられたのである。

樺太に渡った当時は盛んに開拓のため移住民を募集していたので父母は多分それに応じたことだったと思う。

そして入植したところは東海岸の近くで皆岸であった。やがてその皆岸も豊富な木材資源の伐採が盛んになり好況が続き札幌にいた長女も呼び寄せ宿泊所や雑貨商も初め土地も更に一戸分を払下げを受け住み込みで働く人も二人雇ったが、とても仕事に追われて小学校にも恐らく年間三分の二くらいしか通学できなかった。それから父が大正十一年に他界し三男も自営することになったのと四女も嫁したので、宿泊所も店も土地も長姉夫婦に委譲、そして昭和四年に皆岸産業組合に住み込みで、母と二人で働くことになりやがて、昭和九年に妻を迎えた、それから十三年に皆岸産業組合を退職して、豊原市に転出して樺太農業会に勤めることになった。やがて第二次大戦が次第に激化し万一間宮海峡が封鎖されても、島民の食糧確保に全精根をつくしたことは生涯忘れることができない。

樺太農業会で昭和二十年八月終戦を迎えるまでの八年間は私の八十年の人生で再び得られぬ人生の花道であっ